

## Ⅲ-2. ミクロネシア地域でのカヌー文化・伝統的航海術の歴史と継承

### (1) マーシャル諸島の伝統カヌー (Traditional Canoes of Marshall Islands)

Waan Aelōñ in Majel ディレクター アルソン・J・ケレン  
Alson J. Kelen



マーシャル諸島の伝統カヌー

こんにちは。私は楽しくて、ここになかなか出てこられませんでした。まずは、ご招待にあずかりまして、大変光栄に存じます。航海やカヌーの建造、カヌーの記録などに携わったこのようなすばらしい専門家の方々に混じってお話をさせていただきますことを大変うれしく思います。私にとっても良い学びの機会でもあります。

と言いつつ、パソコンを使ってお話ししますが、マーシャルでは、最初のカヌーを造ったのはビキニ環礁の Lewa と Lōmtal という 2 人の男だったと信

じられています。その後、どこの島かはっきりわかりませんが、“精霊の島” という意味のエブ島 (Island of Eb) から Leñtañūr という女性がアイリンラプラプ環礁の島に来て、最初の帆をもたらしました。彼女は息子たちにレースをしなさい、そして一番になった者がマーシャルの王になれると言いました。末っ子の息子が母親を自分の手漕ぎのカヌーに乗せると、母親は彼に帆を与えました。そうして私たちは帆を持つようになったのだと信

### ***Bwebwenato In Waan Aelōñ in Majel (History of Marshallese Canoes)***

#### I. Traditional/Oral History

*1. Lewa im Lōmtal built the first canoes on Bikini Atoll*

*2. Legend has it that the first sail was brought down from heaven by a woman name "Leñtañūr."*

*3. Legend has it that the navigational skill were brought to the Marshall Islands by "Lītarmelu."*

マーシャル諸島の伝統カヌーの歴史

じられています。

その後、またエブ島 (Island of Eb) から二人の姉妹がやってきました。一人は航海術の知識を持っていて、彼女は息子の Lainjin に航海術を教えました。息子は成長するとロングラップ環礁で航海術を教える流派をひらきました。そしてその航海術はロングラップ環礁からマーシャル全体、さらにヤップ、チューク、サタワル、プルスクなどの島々に伝わっていきました。私たちが今そうした島々に行くと、ここの航海術はどこから伝わったのか、と聞けば、マーシャルからだと言われます。

レバレという布をまとった人々という言葉がありますが、1500年代、ヨーロッパの人々がそのようにしてマーシャルにやってきました。1800年になりますとドイツがやってきました。スクナー船をもたらし、そしてコブラのプランテーションを始めました。ドイツ人は、スクナー船の方がより多くの人やコブラを運べるからカヌーよりずっと優れていると言いき、マーシャル人もそう思うようになりました。

それから、第二次世界大戦が始まります。戦争が始まると、カヌーを造ることが許されませんでした。そして、カヌーを使ってマーシャル諸島の周辺を旅する、航海するということが禁じられました。一部の女性にはそれが許されていたのですけれども。

それから、アメリカによる水爆実験がありました。マーシャルの人々、主にロングラップ環礁とビキニ環礁の人々が強制移住させられたという経緯があります。ビキニ環礁とその周辺の人々というのは、特にカヌーを造る技術、そして航海術の知識を持った人たちでした。そういう人たちがいなくなってしまったのです。このように欧米による植民地、それから強制移住の歴史を経て、マーシャル諸島ではカヌーを造る技術、それから航海術の半分以上が失われてしまいました。

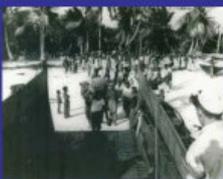
**II. Colonial History**

Before the World Wars

- *Europeans Visits 1520s*
- *Adelert von Chamisso 1820s.*
- *German Empire 1884 – Copra.*
- *World Wars*
- *Nuclear Testing by the US Military – 40s to the 50s.*
  - a. *Relocation;*
  - b. *Lost of culture and of skills*

After the World Wars

- *Result from colonialism*
  - a. *Islands without canoes;*
  - b. *Transportation;*
  - c. *Living conditions*
  - d. *Interest of Youth*
- *Interest to Revive canoe building – Documentation*



マーシャル諸島の植民地時代

しかしもちろん、カヌー建造技術、航海術はとても大事なものです。マーシャル諸島では海上の交通手段というのは非常に重要だからです。マーシャルはとても小さな国。同時にとても大きな国でもあります。マーシャルには1,156の島々があり、それらが広い地域に分散しています。そして32の環礁があります。ですので、この広大な地域に分散する島々を行き来するには、海上の交通手段が必要なのです。カヌー建造技術と航海術の知識がないということは致命的になります。

そういう技術がなくなってしまう、実際にそれを活用する場面を人々が見なくなり、カヌー文化への関心も薄れていきました。そこで私たちが始めたのは、国立の博物館をつかって、カヌーを一から造って記録するという作業でした。しかし、それを実現するのはとても大変なことでした。

カヌーの知識というのは首長に属し、首長が所有しています。首長は現代社会でもとても強力な力を持っています。カヌーを造るには、まず首長の許可を得なくてはなりません。首長だけではなく、首長の家族というのがその知識を引き継いでいきます。祖父から父親、父親から子どもへ、そのまた子どもへと。ですので、まず家族の承諾を得る。そして、首長本人の承諾を得なくてははいけません。これは非常に大変な作業です。

マーシャルの首長は1人だけではありません。何人もいて、首長たちはそれぞれマーシャル諸島の別な場所に土地を所有しています。そして、自分の知識というのは自分だけで持っておきたいと思うわけです。ですので、首長やファミリーの間でのジェラシーみたいなものもあります。競争もあります。ですので、カヌー造りを一から始めて、それを記録に残そうというこのプロジェクトは、最初は大変困難なものでした。

シカゴのフィルム関係の団体がマーシャルに来まして、マーシャルのカヌーを自分たち

## II. Waan Aelōñ Kein - Documentation of the Canoeing knowledge

- *Traditional passing on the traditional knowledge and skills;*
- *Traditional permission from the Chief (Iroij);*
- *Jedke (Traditional replantation and logging);*
- *Step-by-Step construction of canoes and the canoeing culture in the Marshall Islands;*
- *Feasible Survey/study on fish catch comparing canoes and the outboard motor boats*
- *Interested young men and women;*
- *Voyaging to Kwajalein and Majuro Atoll*



伝統カヌーの建造術・航海術の技術の記録

のところに持っていきたいということを行いました。そこで私が長老に尋ねると、持って行ってもいいが代わりのものが欲しい、ボートではなくカヌーだ、というのです。そこで1隻造ることになりました。しかし、パンノキという木がありまして、それを材料として造るのですけれども、パンノキは家族に属したもので、そこから食料も採っているの、なかなかパンノキを使わせてもらうことができませんでした。でも私はベニヤ板では造りたくなかった。そんな苦労があったのですけれども、外からの団体の関与もあって、最初のプロジェクトが始まっていきました。この時は、長老の要求だったので、家族からの許可をとる必要がなく、それほど困難ではありませんでした。

その後私たちは環礁から環礁へと訪ねていきました。そして1992年、クック諸島で太平洋芸術祭が行われた年ですが、私たちの政府はマーシャルを代表するカヌーが必要だとし、50フィートの航海カヌーをエネウエタック環礁で造ることになりました。なぜエネウエタックで造ったかという、そこはとても遠い島で、ミクロネシアに近い。マーシャルの言葉は一つだけど、エネウエタックの方言はポンペイ（州の）カピング語に近い。だからエネウエタックでカヌーを造り、マーシャルの他の島々との違いを比較したかったのです。そうして造られたカヌーはクック諸島に行き、アイツタキからラロトンガまで143マイルくらい帆走しました。そのカヌーにはナビゲーターも天候を予測できる者も乗っていて、素晴らしかった。そしてそのカヌーが一番先に着いた。この成果にマーシャル人自身も驚き、航海術の記録をするプログラムを始めようという思いに至ったのです。

その後、また別の環礁へ、エネウエタックの近くのウジャエ環礁へ行きました。そして、45フィートのカヌーを造りました。その時にやはり首長の許可を得るというプロセスをとらなくてはいけなかったのですが、チーフたちはみんな、ラロトンガに行ったカヌーを見ているので、自分も（カヌーの）レースで一番になりたがった。でも、私たちはマーシャルで最も力のあるチーフの一人であるカブアのところに行き、許可を得ました。カブアは、今もアメリカがミサイル実験をしているクワジェリン環礁のチーフです。カブアは、「よろしい、私の島に行ってカヌーを造りなさい。完成したらマーシャルの海を走るのだ」と言いました。そうして私たちはカヌー造りを始めました。

首長が造っていいと言ったのですけれども、ただ、造る人たちがその知識を共有することをためらいました。そのプロジェクトのリーダーが、カヌーのさまざまな長さをパンダナスの葉やココヤシのロープを使って計るのですが、私たちが撮影をしているときに、私もそれを撮影しながらいろいろと学んだのですけれども、その長さを計るロープを見せようとしません。ですから、私たちはその首長のところに行って、「これではだめだ、技術が撮影できない」と言ったのです。このように、彼らは知識を共有するのをためらうという傾向がありました。

そのほかにも、またプロジェクトがあったのですけれども、別のプロジェクトでは漁獲量をモーターボートとカヌーで比較するというのをしました。カヌーはもう時代遅れだという考えがそのときありましたが、そのように比べることで、実際にこの現代社会でもカヌーを使って生きられるのだということを示しました。日ごろボートを見なれている人にとっては、カヌーがそれだけ大事だという認識がなかったわけです。

それからまた、カヌーのレースをすることで、若者の関心を引くこともいたしました。私たちがカヌーを実際に使う場面に行きますと、若い人たちが来ていました。私は、このような若者が非常に興味を持ってくれることを、とてもうれしく思いました。カヌーの撮影をして記録をとっているところを見に来てくれる、それだけ興味があるのだと思っていたのですが、後日わかったことは、彼らは実は学校をドロップアウトした子どもたちだったのです。彼らのような、学校をドロップアウトした子どもたちにとっては未来がないわけ、何もすることがない。ですから、彼らはカヌーを見に来ていたのです。

実際、カヌーができ上がってクワジェリンへ帆走しましたが、マーシャル諸島の人々でさえ、ちゃんとしたカヌーというものを見たことがありませんでした。見たことがある人も、それはせいぜい 15~16 フィートのカヌーでした。ですから、私たちはスターのような非常に人気者になりました。そうやって若い人たちの関心を引くことができるようになりました。が、私たちがクワジェリンに行ってマジュロに戻ってくると、ラロトンガに行ったナビゲーターは亡くなっていました。私たちは航海術を復活させるために何かをする必要がありました。そこでまたクワジェリンに行き、カヌーの棟梁でナビゲーターでもある人を連れてきました。

その記録をとるといふプロジェクトは終わりましたが、そのプロジェクトは実はアメリカの内務省の資金で行われていました。カヌーはでき上がった。ところが、カヌーの維持の仕方、メンテナンスの仕方が誰もわからないということになったわけです。そのカヌーを手放さずにすんで私はラッキーでした。それから私は、さまざまな学校に行って、若者のプログラムというものに関わるようになりました。私の妻が教師ですので、実は学校の教育の資金を使って、さまざまな場所に行ったりもしておりました。

**II. Waan Aelōñ in Majel Program (Canoes of the Marshall Islands) - TODAY**

- Collaboration with the Youth Program
- Work with Iroij (chiefs) and the land owner of Majuro
- Involving the traditional skill people
- Involving the Business sector and the Behavioral groups
- Work on Curriculum
- Assist with jobs, higher education, and Entrepreneurship



マーシャル諸島の伝統カヌーの今～教育プログラムとしてカヌーの活用

私は、また首長のところに戻って、このカヌーを使って教育というものに関して何かしなくてはという話をしました。ハワイやヤップでも航海をしていることを聞いていましたし。そうすると、チーフが「じゃあ、せっかくでき上がったカヌーを活用しなさい」と言ったわけです。

マーシャル諸島というのは、土地をめぐる紛争が非常に多いところですよ。というのも、土地は皆、私有地なのです。ですから、何かを建てようと思ったら、そこは誰かの私有地なのです。ただ、幸運にも、そのときのマーシャルの大統領がカヌーに非常に興味があって、カヌーを使って何かやるのであれば、ここの土地を使いなさい、と言ってくれました。また、弁護士だった友達が、じゃあ50年の借用書を書けと言ってくれたのです。それで、大統領のところに行き、大丈夫、50年は少なくともこの土地を使う権利がある、という話をしました。そこでまたこの土地の所有者のところに行くと、必要なものがあれば何でも言いなさいと言ってくれたので、カヌーのプログラムをするのに必要な材木を下さいというような話もしました。

最初、非常に難しかった時期もありました。年長の人たちが来てボランティアで教えたり、何かをしてくれたりしました。小さなカヌーを造ったりもし始めました。一方で、でき上がった大きなカヌーのメンテナンスもしなくてははいけませんでした。

ある時子どもたちと作業をしていると、オーストラリアの大使が来て、「カヌーに乗せてくれ」と言うので乗せてあげたのですが、その時大使は「私は君のプログラムを支援したい」「資金を出してあげる」と言ってくれたのです。しかもそのためのプロポーザルを書いてくれると。そんないい話聞いたことがありません。

私のいい友達でアンドリュー・カネユキという友達がいるのですけれども、彼は常々「20ドル持ってきたら、あと20ドル足して40ドルにしてあげるよ」というようなことを言っていたので、オーストラリア大使から1万ドルの資金をもらったとき彼のところに行き、「1万ドルの資金を手に入れたから、これに資金を積み上げて2万ドルにしてくれ」と頼みました。

そうして、ハワイ島に行き、知人の助けを得て木材を購入しました。マーシャル諸島、特にマジロには建造物を造れるような大きな木がないからです。そしてカヌーハウスを建て、若い人たちを招き入れてプログラムをつくっていきました。ただ手探り状態でした。私はとにかく、カヌーの建造技術と操船を教えろ、と言いました。いろいろと手助けしてくれる人も現れました。

私たちの焦点は、特にドロップアウトした子どもたちを教育するというものでした。成果を出さなければいけません。ですので、そのような若者たちに「何かしよう」と声をかけて、実際さまざまな会社などに行って、こういうプログラムでドロップアウトした子どもたちを教育しているのだけれども、どのようにすればこの子たちに仕事を与えてあげられますかということ聞いたわけです。「このプログラムを終了した後に、どうすれば仕事を与えられますか」と言うと、会社の人たちは、「酒飲みでなければ、ちゃんと真面目に働くのであれば協力しましょう」と言ってくれました。

いろいろな人がカリキュラムを作成する手伝いをしてくれました。非常に特徴的な近代

的な部分も、伝統的な部分も織りまざったプログラムでした。そうやってプログラムをつくって、ボランティアの助けも借りて、そしてそのカリキュラムを実行していきました。ただ、カリキュラムの一部として、飲酒をしないようにするという部分なのですが、そこが結構大変だったのです。私は実際、もう一回勉強し直して、カウンセリングの資格を取る必要がありました。

そうやって、この学校が職業学校みたいな感じになっていきました。カヌーがもちろんその手段でした。そして、もちろん授業もありました。科目は数学と英語だけでした。そして、カヌーを持たない人たちのためにファイバーグラス製のカヌーをつくるということを行いました。そこで、大工の技術も得ることができたわけです。ですから職業学校のような側面もあったわけです。

先ほども話に出たハワイのベン・フィニーや、ジョー・ゲンズがマーシャル諸島に来て、そのようなナビゲーションの記録をするプログラムを手助けしてくれました。こうやって私たちは軌道に乗り出したのです。ただ、やはり首長たちから正式な許可をもらっていなかったもので、難しい部分もありました。

現在、やはり気候変動というものが影響を及ぼしてきています。この気候変動に対処する道具の1つが、カヌーもしくはこのような船だと思います。あそこにあるこの写真のカタマランですが、これは私たちがこのプログラムで造った船です。コブラを収集するのに使われています。それから、左側の写真ですが、これは（ハワイ島の）ラハイナです。そこに行って私たちのプログラムの知名度を上げるという活動をしました。

**II. Waan Aelōñ in Majel Program (Canoes of the Marshall Islands) - TODAY**

- *Expand to involve with our Local Government, National Government, and Universities*
  - a. Sustainable Sea transport*
  - b. National and International NGOs and CSOs in promoting knowledge and skills*



マーシャル諸島の伝統カヌーの今 ~教育プログラムで建造したカヌー~

もちろんこちらの博物館（海洋文化館）にもマーシャルのカヌー模型とスティックチャートなどを展示していただいています。右下の写真は昨年の写真ですけれども、マーシャル諸島の周りを航海しているものです。これは私がある環礁から別の環礁に移動しているところです。

それから、2018年には私たちのほうで、ミクロネシアのオリンピックをするという計画があります。そして、伝統的なカヌーのレースをそこに組み込もうと思っています。2018年に私たちは、そのカヌーでポンペイ、チューク、グアム、サイパン、そしてパラオへとセーリングしていこうと思っています。松明を持って行って、ヤップ島まで行こうと考えています。

ということで、以上です。ありがとうございました。